

F・W・ストレンジ (Frederick William Strange) の 署名に関する研究

古城 庸夫*

要 約

F・W・ストレンジに関する研究は今日飛躍的に進んだと言えるだろう。しかしボート競技でストレンジの一番弟子を称する武田千代三郎によって明治37年(1904)博覧館で著した理論実験 競技運動の中にある肖像写真の下につけられたストレンジによる署名だと考えられるものは、今日までそれが真筆だと比較検討するストレンジの他の署名が発見できず明確に判定することはかなわなかった。しかし高橋孝蔵氏の研究によりロンドンでストレンジの他の署名が発見されたことで、筆跡鑑定を試みた結果二つの署名はストレンジによるものであると鑑定を受けることが出来た。

このことにより110年間ストレンジの署名であるとは考えられなかった署名が、ストレンジにより書かれたものであると明確に証明できたといえるだろう。

キーワード: 端艇, ボートレース, 漕艇, お雇い外国人, F・W・ストレンジ

1. 初めに

明治初期に来日しお雇い外国人の一人として英語の授業を担当した、フレデリック・ウィリアムス・ストレンジ (Frederick William Strange) は陸上競技とボート競技をよく指導し、それぞれの競技関係者から陸上競技の父、ボート競技の父あるいは近代スポーツの父と呼ばれ今でも多くの関係者から尊敬されている。彼の生涯における多くの謎は近年東京外国語大学ボート部の卒業生である高橋孝蔵氏の研究により明らかにされた。

初めてストレンジの名前が書かれた書籍は、ボート競技を直接指導され明治22年(1889)に帝国大学(現東京大学)を卒業したボート競技の第一回校内競漕会で優勝した武田千代三郎が明治37年(1904)に著した理論実験 競技運動であ

ると思われる。この著作はボート競技においてストレンジの指導を受けた者の中でも一番弟子と自負していた武田千代三郎がスポーツ全般にわたって解説を行ったものであった。

またその著作の中には今日では唯一とされるF・W・ストレンジの写真が掲載されており、今日のスポーツ関係の著作の多くがその写真を引用している。しかしその写真の下部にはF・W・ストレンジの署名と考えられるものが掲載されていたが、以降に発行された著作にはその署名が削除されている。おそらく削除された理由は明治21年(1888)ストレンジが若くして死亡したために彼の遺品の多くが行方不明になったためではないかと考えられる。つまりストレンジの生涯を研究したものがストレンジの署名と判断するための比較に必要なストレンジの他の署名が見つからなかったため、削除したのではないかと考えられる。そのため今ではストレンジの署名と思われるものが残っていることさえあまり知られていないというのが現状である。

2014年11月30日受付

* 江戸川大学 経営社会学科准教授 コーチ学

そこで本研究では新たに発見された資料により、ストレンジの署名の正当性を明らかにすることを目的とする。

2. 新資料の発見

渡辺孝蔵氏によればストレンジの研究は昭和48年(1973) 渡辺融東京大学名誉教授によるF・W・ストレンジ考(体育学紀要第7号)が洞察力に富んだ分析を与えた。また昭和53年(1978)に木村毅氏の著した日本スポーツ文化史のなかでも、ストレンジ関係の資料が少ないことが述べられている。しかし時がたち平成8年(1996)阿部生雄筑波大学教授が不昧堂から発行した「イギリスのF・W・ストレンジ」はその詳細な研究から、アメリカ人の元ボート選手でリチャード・ルイス博士(Richard・Lewis)やイギリスの家系研究家レイ・フェザー氏(Rae・Fether)に多大な影響を与えストレンジ研究は大幅に進んだとされ

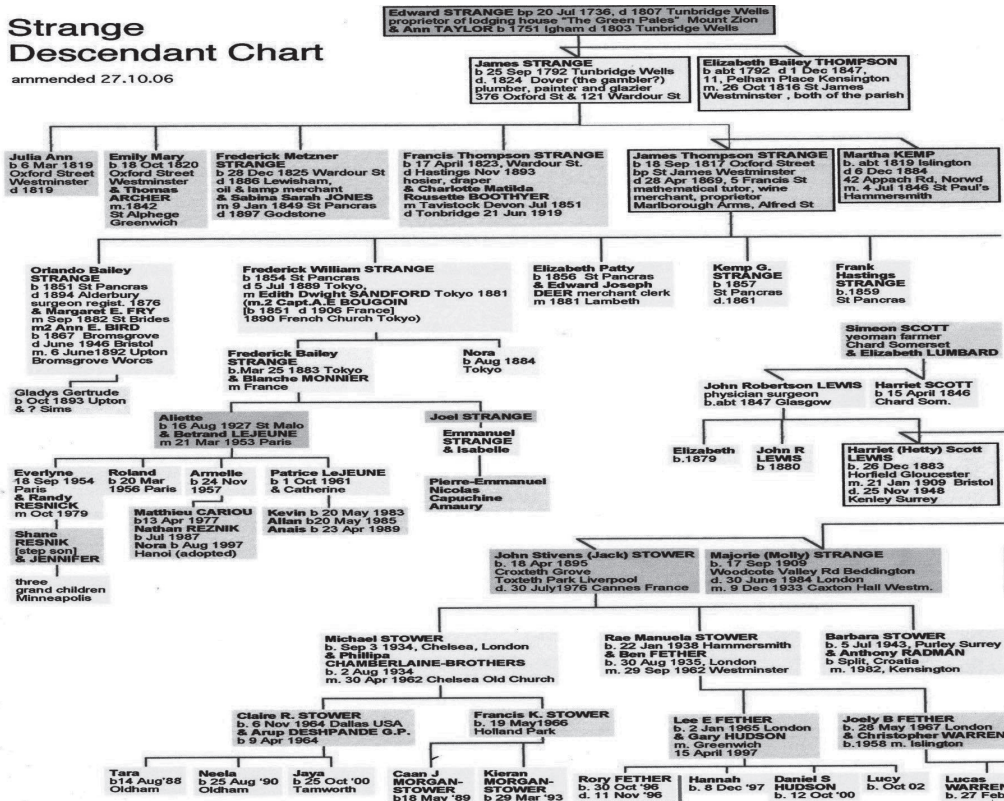
ている。

また高橋孝蔵氏によればF・W・ストレンジの急死以降未亡人のエディス(Edith)は、フランス公使館付武官を務めたことのあるブグアン退役大尉(Alexandre・E・Bougoin)と結婚した。ストレンジとの間に誕生していたフレデリック・ベイリー(Frederick・Bailey)とエレノア・マーサ(Nora)はストレンジの姓はそのまま名乗った。やがて一家はフランスに帰国し息子のフレデリック・ベイリーはフランス人と結婚し二児が誕生した。娘のエレノア・マーサはコルシカ島に生活の場を設けたようだが詳細については不明である。

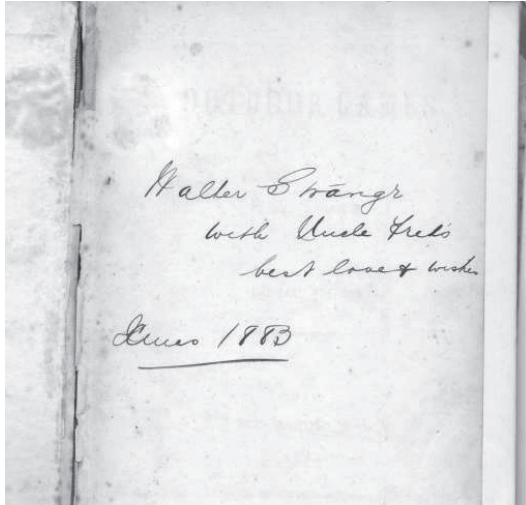
高橋孝蔵氏はフレデリック・ベイリーの6人の孫たちが健在であると述べているが、ストレンジが日本で初めて明治16年(1863年)に丸善から出版された書籍アウトドアゲームス(OUTDOOR GAMES)がレイ・フェザーの従弟にあたる古書収集家によりロンドンの古書店で発見され無事に子孫に買い戻された。またその本の表紙の裏には

Strange Descendant Chart

amended 27.10.06



1. イギリスの家系研究家レイ・フェザー氏 (Rae・Fether) 蔵



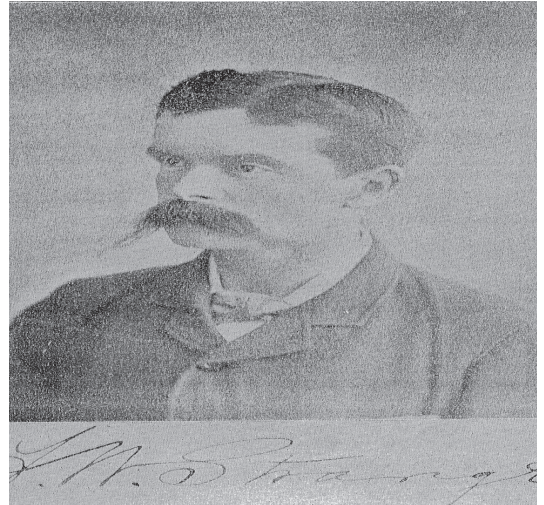
2. イギリスの家系研究家レイ・フェザー氏 (Rae・Fether) 蔵
1883年(明治23年)「アウトドア ゲームス」の表紙裏に残されたストレンジ氏の署名と思われる イギリスの家系研究家レイ・フェザー氏 (Rae・Fether) 蔵

「Walter Strange With Uncle Fred,s Best Love And Wishes Xmas 1883」とのストレンジによって書かれたメッセージと署名が残されていた。つまり「ウォルター・ストレンジへ 叔父フレッドの最高の愛と希望を込めて 1883年 クリスマス」という内容であり当時11歳になっていた甥がパブリックスクールに入学し厳しいスポーツの鍛錬を受けることになることを心配してストレンジが贈ったものだと考えられる。

つまりロンドンで発見されたアウトドアゲームスの表紙に残されたストレンジのものと思われるサインが発見されたことで、武田千代三郎の著した「理論実験 競技運動」に残されたストレンジのサインと思われる署名の正当性を検証することが可能になったのである。

3. 新しい署名との比較および検討

高橋孝蔵によれば著書「倫敦から来た近代スポーツの伝道師 副題お雇い外国人F・W・ストレンジの活躍」のなかで、新たにロンドンで発見された「アウトドア・ゲームス」に書かれていたストレンジと思われる筆跡と、武田千代三郎著「理



3. 武田千代三郎著 明治37年(1904) 理論実験 競技運動 ストレンジの署名と思われる 古城庸夫蔵

論実験 競技運動」の写真下部にある署名は、かなり明白と判定しストレンジと断定したと述べている。

しかし今後ストレンジについて新たな著作がなされた場合には、現状では明らかにストレンジのサインであるとの判定が専門機関等からなされていなければ、これまでと同じようにストレンジの写真しか引用されないのではないと思われる。そこで著者は日本筆跡鑑定協会正会員である藤田筆跡解析鑑定所に二つの署名の二つの署名が同一人物によって書かれたのかを明確にするために、二つの署名の異同診断を依頼した。

筆跡異同診断書によれば、

1. 資料は二つの写真の署名とした。
2. その結果として鑑定資料のサインは本人のサインであると認められる。
3. 異同診断手法概略としてF T A解析手法(Falt・Tree・Analysis)で行い、強い光を本紙の下からあてて、文字の輪郭を描き、その上から筆記用具でなぞる手法である透写や本人のサインを見てそれに似せて各手法である臨書の二つの観点から調査した。それによればいずれも字画形態をまねるため、筆勢や筆圧等をまねることは至難であるため、サインを書くときの運筆、字画形

態。筆勢、筆圧に注目して行った。また欧米人のサインは、その字画形態に芸術的要素も含まれているので、その点にも留意して行った。

サインの字画形態の特徴

- (1) ストレンジのサインには S,r,e の三文字に特徴がある。
- (2) S は筆者固有の形状である。
- (3) r は通常筆記体で書かれるが、ストレンジは活字体の r を書いている。
- (4) e の字は左に倒れている。
- (5) 以上のことから 3 文字の特徴が一致している。

サインの筆圧のかかり方

- (1) a の字には筆圧の違いがみられる。
- (2) W,S,r,g,e の筆圧のかかり方は同じである。
- (3) 鑑定資料全体では筆圧の強弱の差が少ない。
- (4) なぞり文字の特徴は見受けられない。
- (5) 鑑定資料のサインは作為的に書かれたもの

ではなく、自然に書かれたものである。

4. 異同診断結果は上記の結果より、鑑定資料のサインは F・W・ストレンジ氏であると認められる。

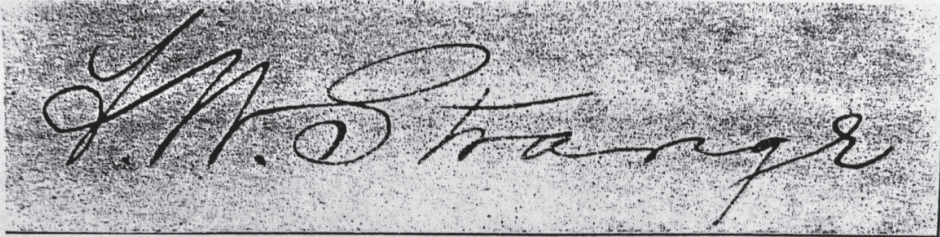
つまり藤田筆跡解析鑑定所の診断によれば、今回ロンドンで発見されたストレンジのサインと、武田千代三郎により著された「理論実験 競技運動」のサインは全く同一人物によって書かれたサインであるということが科学的に証明されたといえる。

4. まとめ

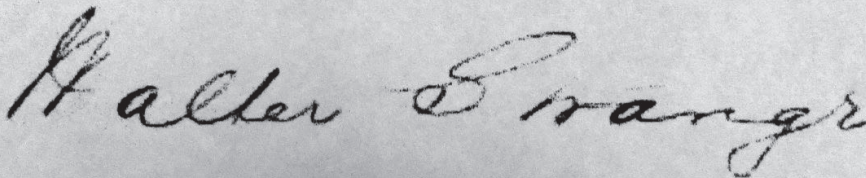
理論実験 競技運動 明治 37 年 (1904) 博聞館発行で武田千代三郎によって F・W・ストレンジの業績とサインが広く世の中に紹介されて以来、110 年間にわたってそのサインがストレンジのサインであることが証明できなかったために、

6. 異同診断結果にいたった根拠

鑑定資料のサイン



対照資料のサイン



長い間サインの存在すら忘れ去られていた。

しかし今回の研究で藤田筆跡解析鑑定所から出された筆跡異同診断書の鑑定から、二つのサインが本人により書かれたものであるという結果を得ることができたことで、今後に行われるストレンジに関する研究や著作にはストレンジの写真とサインを使用することによりストレンジの人柄をより紹介できるようになったのではないかと考えられる。

参考文献

- 加藤橋夫訳 『体育の世界史』 (ベースボール・マガジン社 1976年)
 加藤橋夫・田中鎮雄訳 『近代イギリス体育史』 (ベースボール・マガジン社 1973年)
 松村高夫・山内文明訳 『英国スポーツの文化』 (同文館出版社株式会社 1995年)
 今村嘉雄・石井トミ 『ライス・世界体育史』 (不味堂書店 1968年)
 今村嘉雄 『西洋体育史』 (日本体育社 1953年)
 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編 『現代体育・スポーツ体系』 (株式会社 講談社 1984年)
 古城庸夫 『コーチ学入門』 (江戸川大学スポーツビジネス研究所 2005年)
 古城庸夫 『ボート競技の歴史年表』 (江戸川大学スポーツビジネス研究所 2000年)
 古城庸夫 『日本におけるボート競技の起源についての考察』 (江戸川大学紀要 第19号 2009年)
 川崎晴朗 『築地外国人居留地』 (雄松堂出版 2002年)
 木村毅 『日本スポーツ文化史』 (ベースボール・マガジ

- ン社 1981年)
 菱谷武平 『長崎外国人居留地の研究』 (九州大学出版会 1988年)
 久保勘三郎 『東京帝国大学漕艇部五十年史』 (東京帝国大学漕艇部 1936年)
 宮田勝善 『改定新版 ボート百年』 (時事通信社 1976年)
 半藤一利編 『東京大学漕艇部百年史』 (東京大学淡青会 1992年)
 四神会 『一橋ボート百年の歩み』 (四神会 1983年)
 稲門艇友会 『漕艇部の百年 早稲田ボート文化史』 (100年史編纂委員会 2002年)
 東京外語艇友会 『外語ボート100年』 (東京外語艇友会 2001年)
 三田漕艇倶楽部 『百年のあゆみ』 (慶応義塾体育会端艇部 1980年)
 東北大学漕艇部百周年史部会 『東北大学漕艇部百年史』 (東北大学漕艇部百周年記念事業会 2003年)
 京都大学体育会端艇部 『京都大学端艇部百年史』 (京都大学体育会端艇部 2000年)
 日本大学ボート部 『力漕百年』 (日本大学体育会ボート部 2005年)
 東京経済大学葵水会 『100年史』 (東京経済大学葵水会 2004年)
 蔵前漕艇倶楽部 『東京工業大学端艇部100年史』 (蔵前漕艇倶楽部 2001年)
 明治大学大学端艇部編 『明治大学体育会端艇部百年史』 (明治大学端艇部実行委員会 2004年)
 同志社艇友会 『同志社ローイング100年』 (同志社艇友会 1991年)
 武田千代三郎 『理論実験 競技運動』 (博聞館 1904年)
 高橋孝蔵 『倫敦から来た近代スポーツの伝道師』 (小学館 2012年)